

ドレッサージュホースに育てよう!

ピルーエット パートⅢ

日本の馬術競技は、年末の全日本クラスの競技会を最後に、3か月ほどシーズンオフとなります。これは、インドア競技場施設が普及していない現状では仕方がないことでしょう。しかし、馬を調教する上では、競技シーズンに向けてチャレンジングなトレーニングメニューを実行するチャンスでもあります。私は毎年この時期に、それぞれの馬に新しい課題を設定し、馬とともに取り組むようにしています。今年はオースミレブンとは違うサラブレッドと、フライングチェンジとピルーエットにチャレンジしています。

ピルーエットのトレーニングについて紹介するのも今月号で3回目となりました。今回は、収縮駢歩から前軀を旋回させていくワーキングピルーエットを行うサードステップです。前回の、頭頸を低く保つセカンドステップに多くの時間を費やす馬もいるでしょう。しかし、完璧を求め過ぎても人馬ともに行き詰まります。少しでも収縮しながら緊張が緩まってきたら、旋回の準備に入りましょう。

3. サードステップ 旋回の準備とワーキングピルーエット

旋回をするための準備として、以下の2つの運動ができるようにしておきます。

(1) 「肩を内へ」

収縮駢歩で頭頸をやや下方に位置させると同時に、「肩を内へ」を行います。これは、輪乗り運動と直線運動のどちらでも実施できなければなりません。ここでも《内方姿勢》がポイントになります。隅角通過、巻乗り、肩を内へ、ハーフパス、そしてこのピルーエットでも《内方姿勢》が必要です。騎手が内方手綱を控えて屈曲を求めると馬が内方姿勢をとり、内方手綱を緩めて下方に伸展することを求めると馬が頭頸を低く伸展していく、という約束事をしっかりと確立していることが、この先の馬との運動を楽しくしていきます。ピルーエットでは、収縮駢歩をしながら馬の肩の位置をコントロールできることが必要で、これは馬を真つすぐにできる、ということでもあります。



いわば、ピルーエットに入るための最初の準備が「肩を内へ」の体勢で、全てはここから始まります。

- ・内方脚と内方騎座…前方に位置して屈曲の軸になる
- ・内方手綱…内方屈曲と馬の頭頸を低く保つために積極的に使うが、馬の反応を見ながら、使い続けることがないように注意する
- ・外方手綱…馬の肩を内側へ入れるように押して使うが、それ以外は馬の体勢を維持する大切な支点となる
- ・外方脚…馬の腰が外側へ膨れるのを防ぐ“外の壁”の役割をする

(2) 「腰を内へ」

私は、この運動をピルーエットの準備段階として多用します。特に、後軀を内側へ導きやすい輪乗り運動で行います。

扶助は、外方脚を後ろに引き、馬の後軀を内方に向かってステップするように、必要な加減で使用します。前軀を旋回させる時の軸となる内方後肢を外に逃がさないためです。ハーフパスをするように内方に屈曲させ、騎手の扶助もハーフパスとほとんど同じと考えます。後軀が外に膨れてしまうようであれば、外方脚をしっかりと強く使い、馬に後軀を内側に保つことを教えます。

このようにして、旋回に入る前に、馬の内方後肢が軸になることを馬に伝えていきます。

- ・内方脚と内方騎座…前方に位置して屈曲の軸になる
- ・内方手綱…内方屈曲と馬の頭頸を低く保つために積極的に使うが、馬の反応を見ながら、使い続けることがないように注意する



- ・外方手綱…内方姿勢で屈曲させる扶助と連動しながらも支点となり、屈曲に沿うように譲ることも必要
- ・外方脚…腰を内側へ導くために、必要に応じて外方脚を積極的に使用する

(3) ワーキングピルーエット (旋回)

いよいよ旋回です。ワーキングピルーエット (以下 WP) とは、ピルーエットの基礎となる運動で、軸となる後肢が前へ動きます。《前進》と《旋回》の組み合わせと考えるとよいでしょう。ピルーエットのトレーニングは、ほぼこの WP で構成されます。

これまでのトレーニングで WP の準備はできています。「肩を内へ」と「腰を内へ」で準備してきた馬の体勢から、以下の手順で前駆を旋回させていきます。

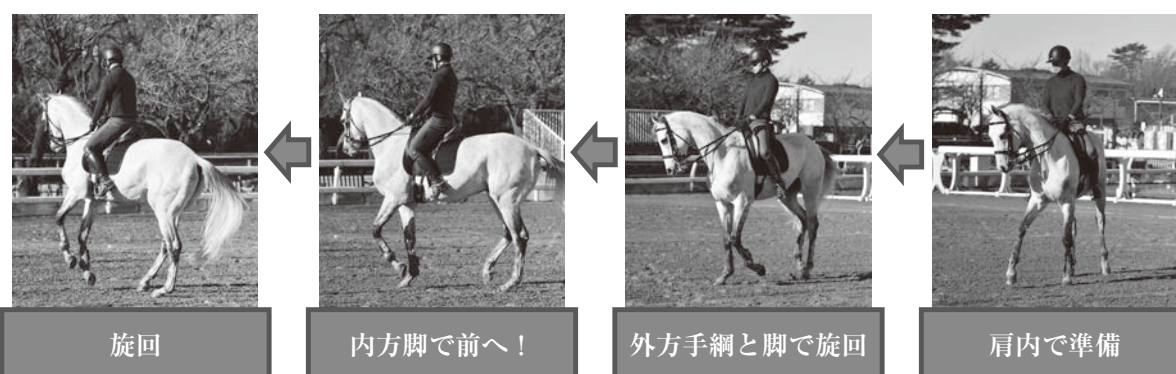
◆輪乗り運動で徐々に歩幅を縮めて輪乗りの大きさを詰めていく

- ① 内方脚を使いながら内方手綱で屈曲させ、内方姿勢をとりながら頭頸を低く保つ
- ② 騎手は内方騎座に乗り、体重を内方後肢に乗せるようにしてステップを縮める
- ③ 外方手綱と外方脚でハーフパスをするように内側へ馬を導く

ここでは、《前進》>《旋回》という意識を忘れてはいけません。そのために私が頭の中で唱え続けることは、旋回 (外方手綱・外方脚) → 前へ! (内方騎座・内方脚) → 旋回 → 前へ! → 旋回 → 前へ! の繰り返しです。1歩横へ旋回したら、1歩前へ、というように、常に騎手は旋回と前進のバランスを維持しなければならず、それが乱れれば、当然、馬はリズムと体勢を維持できなくなって、美しいピルーエットを実施することはできません。

これは、ピルーエットという運動を知らない馬に調教する時だけでなく、完全に調教された馬においても同じです。この運動に関して騎手の騎乗技術を向上させたいければ、WP を徹底して身に付けるようにします。WP でピルーエットの基礎を築くことが、この運動の全てです。競技で求められているピルーエットを実施しているうちに崩れてしまった場合も、WP を最初から行うことで修正していくことができます。

WP のトレーニングを、クォーター → ハーフ → フルと段階的に調教する考え方もあります。しかし私の場合は、輪乗り運動の中で馬が“できるきっかけ”を得やすい環境を作るようにしています。



WP は上記の扶助操作で実施します。しかし、そう簡単にはいかないのがピルーエットです。問題は WP を実施しようとする際に以下のことが生じた場合です。

- ・収縮を求めた際に頭頸が上がり緊張する※
- ・後肢だけを勝手に左右に変換してしまう※
- ・内方姿勢がとれない (常に外方姿勢になる)
- ・旋回が速くなりすぎる (歩数が少なくなる)
- ・駈歩を維持できず速歩になる※
- ・旋回をしない※

(※印は、オースミイレブンが調教中に陥った問題点)

今回は、これらの問題点の修正方法をまとめていきます。また、競技会でも求められているハーフピルーエット (S クラス・セントジョージクラス)、ピルーエット (インターIクラス・GP クラス) の実施方法についても考えます。